千葉県習志野市・大久保学園商店街の変容過程

―軍郷から大学街への転換とその後―

4 年 9 組 44 番　丸橋優希

1 章　序章

1-1　研究の背景

商店街は何らかの商圏によって支えられ、顧客の層により商店街の性質も異なる。とりわけ、鉄道駅や寺社境内など明確に主たる顧客層を決定付ける要素を地域的な核として持つ商店街も少なくない。歴史の中では、この核が短期間のうちに急激に置き換わってしまう事例がある。これには戦前の軍郷から基地が消滅してしまうようなケースも当てはまる。こうした場合、商店街は自身をどのように変化させ存続を図るのだろうか。

本研究では研究対象地に千葉県習志野市の大久保学園商店街(以下、大久保商店街)を選んだ。その理由は、戦前は軍施設、戦後は大学、と商店街の近隣に所在する大規模な施設が大きく変化しているからである。

1-2　研究の目的

1-2-1　1945 年以前

それまで商人がほとんどいなかった地域に軍施設が出来たことで、どのように商店街が発生・発展したか、歴史的変遷を把握する。また、当時の大久保商店街の姿を可能な限り復元する。

1-2-2　1945 年～1974 年

終戦後の「軍郷」から「大学街」への転換を、店舗の扱う商品や業種の変化から明らかにする。

1-2-3　1974 年以降

大学街としての大久保商店街を取り巻く環境が目まぐるしく変化する中で、大久保商店街と社会との関係について考察する。

1-3　研究の方法

大久保商店街は、図 1 のように京成大久保駅から東邦日大前通りまでの約 700m、大久保通りと呼ばれている箇所とする。また、駅側を入口とし、大久保通りを中心に成田方面に並ぶ店を東、上野方面に並ぶ店を西、大久保十字路より大学側にある店を北、京成大久保駅側にある店を南という 4 つのエリアに分けて扱う。

図 1　研究対象地

1-3-1　1945 年以前

習志野市史や松井天山が 1928 年に描いた『津田沼町鳥瞰図』などの文献資料、聞き取り調査を中心に研究を行う。

1-3-2　1945 年以降

住宅地図をもとに、以下の定義で作成した図 2 のようなデータベースを用いて研究を行う。

・基本的に道路に面した 1 階の店舗のみを対象とする

・商店名は住宅地図に掲載されているものである

・分類、住所は現地調査、『1998 年　習志野商工名鑑』を参考にした

・分類は表 1 のように行う

表 1　住宅地図分類凡例

大分類	小分類	補足	大分類	小分類	補足
生活雑貨	衣料品	洋服、呉服、靴、鞄など	娯楽施設	パチンコ、麻雀、ゲームセンター、ビリヤード	
	時計、眼鏡、貴金属、布団、家電、書籍、文房具、タバコ、薬局、雑貨、燃料、新聞		ビル・住居		雑居ビル、マンション、アパート、戸建など
	コンビニエンスストア		金融・保険	銀行、信用金庫、保険	
	スーパーマーケット		自由業	不動産、病院、歯科医院、整骨院	
	その他	玩具など上記以外の生活雑貨	その他		事務所、駐車場、倉庫など
食品		青果、肉、魚、漬物など	空き地		空き家、建設中など
飲食業	食堂・レストラン・その他	蕎麦屋、中華料理店、寿司屋など店舗内で食べることの出来るもの	不明		判断出来なかったもの
	喫茶店、居酒屋、スナック				
	チェーン店			グラフなどの「その他」は、大分類の金融・保険、自由業、その他を合わせた値を使用	
サービス	美容室・理容室、写真、クリーニング、宿泊				

商店名・個人名	住所			備考	分類	
	丁目	番地	号		大分類	小分類
ミスタードーナツ 京成大久保駅前ショップ	1	23	1	・2F…オンブラージュ	飲食業	チェーン店
雷門美容室	1	23	1	・雷門ビル	サービス	美容室・理容室

図 2　住宅地図データベース例

2 章　1945 年以前の大久保商店街

2-1　習志野市、大久保と騎兵連隊の歴史

ここでは割愛する。

2-2　商店街の発生と人々の生活

習志野市は古くから馬と関係の深い場所である。習志野原と呼ばれる、現在の習志野市、八千代市から船橋市の新京成電鉄沿線地域には江戸幕府の軍馬育成のための牧場があった。大久保は延宝年間に現在の大阪府羽曳野市周辺にいた武士の市角頼母などが移住し開拓されたとされる。水が得にくい地形だったため、大久保は周辺の集落より人口が少なく、サツマイモを育てる農家以外には大工が少数いる程度だった。

明治維新後、新政府は欧米に準拠した「近代化」を目指し、その政策の1つとして1874年9月に習志野原に広さ約1200haの習志野原演習場が開設される。近隣の土地を買収して習志野原演習場は拡大し、明治38年(1905年)にほぼ完成を迎える。

1901年、習志野原から転営した第一旅団(騎兵第13、14連隊)と第二旅団(騎兵第15、16連隊)が大久保に設置される。これに伴い、大久保や近隣の農家が商売を始めたこと、別地域で商売をしていた者が大久保に移り住んだことで、大久保の門前町化が進む。更に、1905年に日本の勝利で日露戦争が終わったことも大久保の商店街形成に影響を与えた。翌年2月16日に騎兵第一旅団は大久保に戻り、出征した兵隊の一部はその後帰郷せずにそのまま大久保で報償金を元手に商売を始める者がいた。1910年元旦の千葉毎日新聞に掲載された二宮津田沼連合年賀広告には大久保の文字が目立ち、大久保が10年足らずのうちに発展したことをよく示している。

日露戦争後に習志野原演習場が各地の兵士の軍事演習場としての機能を担ったことで軍施設関係者やその家族、職人、見学者で街は更に賑わうようになる。大久保で商店が集中していたのは東金街道、連隊前通り、松山通りである。松山通りは、京成大久保駅が出来るまでは輸送「駅」として機能し、津田沼駅と大久保の間に人力車や乗合馬車が走っていた。

1926年、京成大久保駅の完成により大久保の様子は大きく変化する。連隊と京成大久保駅が一直線になったことで、店舗はアクセスの良い大久保通りへ移転し、徐々に松山通りは寂れていった。表2は大久保商店街にあった主な商店についてまとめたものである。多くは軍への出入りが許された御用商人である。

2-3　昭和3年の大久保の姿

図3は松井天山の『津田沼町鳥瞰図』である。この鳥瞰図をもとに、以上のことから復元される1928年の大久保商店街の姿は図4のようになる。(★1～7)

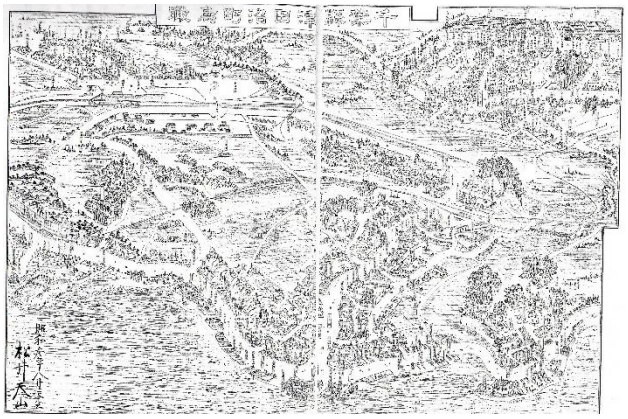

図3　千葉県津田沼町鳥瞰

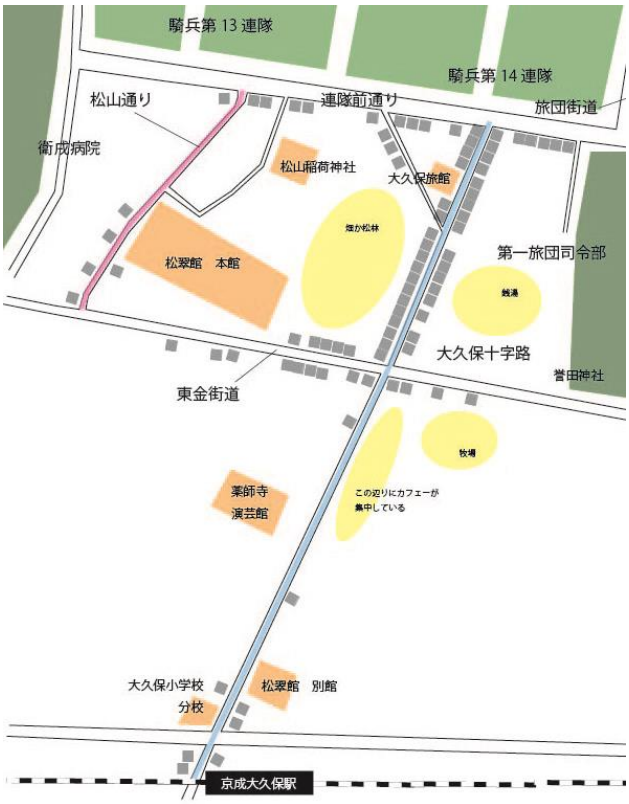

図4　1928年の大久保商店街

表2　大久保商店街の主な御用商人

分類	備考	例	分類	備考	例
旅館	入隊前の検査に来た兵隊、入隊時の見送りや面会に来た家族などが利用	岩崎館、大久保館、松翠館、清楽	馬関係	馬具屋、馬材屋、馬の寝藁や食糧を扱う馬糧店など 連隊に由来	田島馬具店、広瀬今、中山三四郎、石橋蹄鉄店
食堂	兵隊向けの食堂	池田屋食堂、兵頭	軍用雑貨店	日用事務の消耗品を納入 兵隊向けのお土産や一般市民の日用雑貨も扱う	小島軍用店、竹内土産物屋
カフェー	社交場として利用	すずらん(鈴蘭)、ほまれ、いずどう、みどり、ふじ	印刷	軍の文書の印刷などを行う	酒井活版印刷店
写真	入隊・除隊の記念撮影など	小澤写真店、塚本写真店	食品	肉、青果、パンなどを連隊に収める他、一般市民にも販売	紅谷商店、相原肉店 高橋野菜組合、梨屋、八百松 石橋パン屋、柳生菓子店、 カナベシ堂
洋服・帽子	軍服・軍帽を扱う	高橋洋服、河西洋服店、林洋服店 保岡、河西帽子店			
時計	時間に厳格な軍での生活の必需品 販売・修理を行う	間中時計店、瀧本時計店	酒屋	瓶詰や缶詰、お菓子、パン、軍装用品、切手、葉書など酒以外も扱い、連隊から要求されたものの手配・納品も行う	張替酒店、河合酒店、船橋屋酒店、渡辺酒店

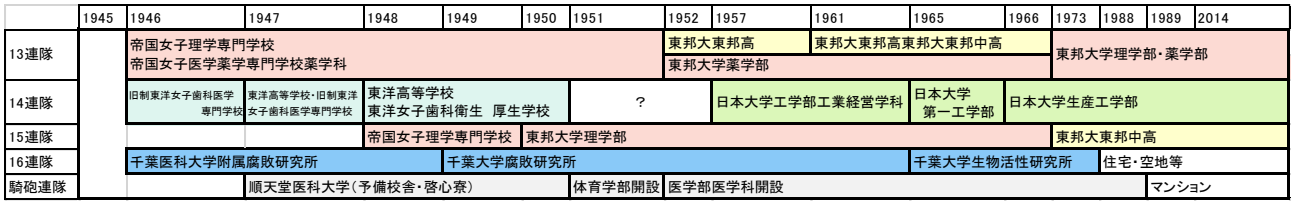

図5　戦後の大久保の教育機関の変遷

3章　1945年～1974年までの大久保商店街の姿

3-1　大久保の教育機関

1945年から現在まで、大久保の教育機関の変遷は図5のようになる。

3-2　学生生活の様子

旧制東洋高等学校の学生は戦後の物資難に苦しみながらも、手作りの衣装で文化祭を行ったり、東邦大学や順天堂大学と野球の練習試合を行ったりと学生生活を楽しんでいた。それから10年ほど経った1960年代の千葉大学の寮生活では、生活費のためにアルバイトに励んだことや、毎日どこかの部屋でタバコを吸ったり酒を飲んだりしながらの麻雀を楽しんだことを思い出にあげる卒業生が多かった。また、どちらの学校でも近隣の学校とのコンパなどはあったようである。(★8・★9)

3-3　軍郷から大学街への転換

鳥瞰図と住宅地図を比較した結果も合わせると、大久保商店街の店は3つに分類が出来る。

A.終戦とともに閉店・全く異なる業種に変更する店舗

主に軍からの需要が特に高かった業種であったため、終戦前後に商売自体をやめてしまう、大久保から移転する、全く別の商売を始める、など。新しく商売を始める場合の経営者は戦前と同一人物かどうかは不明である。戦前に多く見られた馬に関係する店は、特に顕著にこの傾向を見せる。他にもポンプ店から化粧品、食堂からスポーツ用品店のように新しい顧客層である学生に合わせた業種に変更する店がある。戦前には見られなかったパチンコ店、ゲームセンターのような娯楽施設もここに分類出来るが、変化する店に傾向は見られなかった。

B.元の商品と関連のある商品に変更する店舗

髪結店から美容室、軍服から紳士服のように、元の業種を時代や新しい顧客層に合うようにした店。A との違いは、戦前と戦後で経営者は同じであるという点である。自分の持つ技術や卸業者との関係はそのままに、商品だけを変化させられる。

C.顧客層だけが変わる店舗

書籍や時計などは軍と学校が求めるものが同じだったので顧客だけが変わった。また、食品を扱う店では納入先が軍から近隣の学校へと変わる例が数軒確認出来た。

以上のことから、大久保商店街の軍郷から大学街への転換はまず軍が撤退したのと同時期に一部の店が閉店・大久保から移転することから始まる。しかし、大久保の場合は1946年と終戦後すぐに学校が誘致され、1948年にはすべての跡地に学校が移転している。このように早い段階で新たな顧客層が確保出来たことが大久保商店街の大学街化を後押しすることになる。閉店・移転された店に新しく経営者がやってきて、それぞれの店舗は学生に合わせた商品や業種で商売を行う。そして、1960年代には学生街としての大久保商店街が完成した。

4章　1974年から現在までの大久保商店街の姿

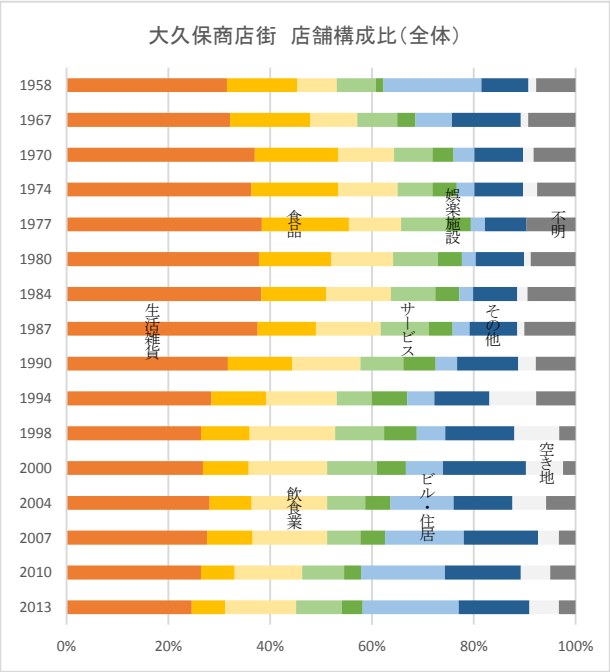

図6

店舗構成比では食品が1977年をピークに減少している。近隣のスーパーマーケットの影響だと考えられる。現在でも残っている店舗は御用商人や前後すぐに開店した店舗が中心となっている。一方飲食業は緩やかな増加傾向を示す。ビル・住居はバブル経済に伴う建設ラッシュの影響から 1990 年頃から現在まで急激に増加し、2013年では生活雑貨に次ぐ割合である。空き地率は1990年以降から高くなっており、この傾向は北側で顕著である。

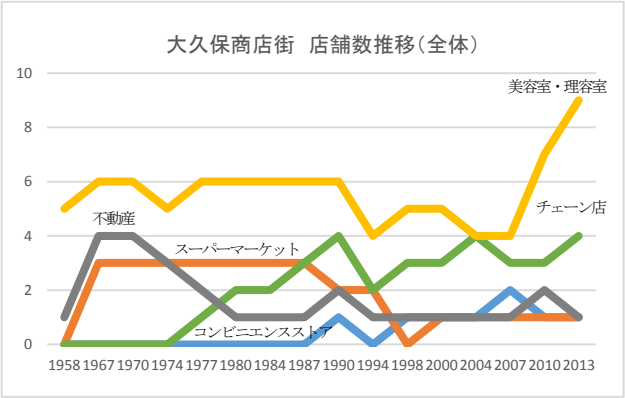

図7

次に店舗数推移を見ていく。チェーン店は1974年、コンビニエンスストアは1987年に初めて現れてから、増加傾向にある。一方スーパーマーケットと不動産店は非常に緩やかな減少傾向にある。また、美容室・理容室は2007年から急激に増加している。

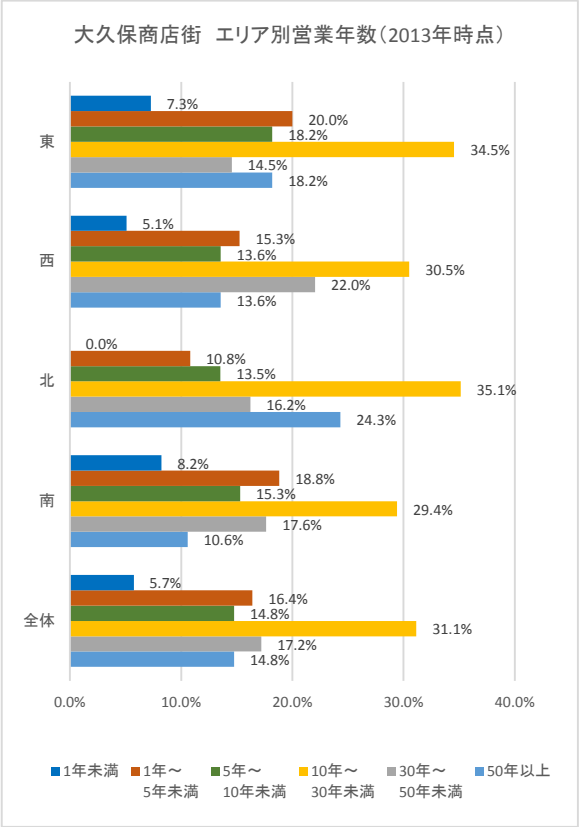

図8

2013年時点の営業年数では、10年～30年未満の店が最も多く、50年以上続く店も14.8%と高い割合を示している。エリアでは東西では大きな差は見られないが、南北では1年未満の店と50年以上の店で大きな差が見られた。

大学街としての商店街が完成してからは、社会情勢の影響を受けることが多い。

5章　結章

5－1　結論

商店街の核が変わることで、商店街は新たな顧客層に商品や業種、業態を合わせることで対応していく。

戦前の大久保商店街の中心店は御用商人であり、特に馬に関係する店舗や酒店が有力だった。しかし現在の大久保商店街にはそのような店舗が存在しない。かつての御用商人はもちろん、他の商店街のようにスーパーマーケットのような新しい大型店でもない。

エリアごとに見ると、北側は経営者の高齢化が進み、跡継ぎもいないという問題を抱えており、空き家率や店舗数から考えても閉店する店舗が今後更に増加することが予想される。北側は大久保商店街の発生当時からある店舗が集中しており、営業年数が半世紀を超えるものは約4分の1を占める。戦前からの卸業者との関係や地域に根差していることが影響している。

南側は京成大久保駅が完成してから発展したことから、3章で述べたAの店舗が多いと考えられる。御用商人を除き営業年数の長い店舗は古くからある店舗に劣らない流通網を獲得している。また、南側のテナントの入れ替わりの激しさは駅に近いことで賃貸料が高いことも影響していると考えられる。

地域環境、社会情勢や流通の変化にどれだけ迅速に対応できるかが商店街で生き残るだけのタフさに繋がる。

5－2　今後の課題

(1)1945年以前、1945年～1974年までの研究では、今回の大久保商店街の定義では十分と言えない。松山通りや東邦日大前通り、東金街道まで定義を拡大することで、より大久保商店街の変容過程が見える。

(2)住宅地図の性質上、2階以上の店やビル内の店が今回の結果には含まれていない。実際にはコンビニエンスストア、チェーン店がもっと多いと予想される。

参考文献

1)山岸良二・『秋山好古と習志野』刊行会　『秋山好古と習志野』、2011年
2)習志野市役所企画調整室広報課　『<解説資料集>　わたしたちの郷土習志野』、1978年
3)習志野市教育委員会　『新版　習志野――その今と昔』、1990年
4)習志野市教育委員会　『習志野市史　第一巻　通史編』、1995年
5)習志野市教育委員会　『習志野市史　第四巻　資料編(Ⅲ)』、1994年
6)習志野市教育委員会　『習志野市史　別編　民族』、2004年
7)種田哲三　『松井天山　千葉県市街鳥瞰図・解説』、聚海書林、1989年
8)武井順一　『千葉大学の思い出　―習志野市・千葉市―』、2006年
9)東洋学園大学　東洋学園史料室　『最後の旧制高校　東洋高等学校―教養教育への挑戦―』